

CLOSE UP

クローズアップ

植木
隆伸
教諭

金城学院高等学校

1967年横浜市生まれ。大阪外国語大学(現・大阪大学外国語学部)卒業。一般企業に勤務後、1999年から金城学院中学校の教員に。中学でソフト部、高校でバドミントン部などの顧問を歴任。現在は高等学校で英語科を教える。

たくましさ、しなやかさを持つ女性に

高校時代から中南米の文化や国柄に興味を抱き、

大学時代にはメキシコからコスタリカまで2ヶ月ほどを一人で旅した植木先生。

「英語は表現や情報発信のツール。単語や文法の暗記だけでとどまってほしくない」と話し、

生徒たちには「国内外で活躍し、さまざまな国の人々との交流を」と願っていらっしゃいます。

また「社会の中でたくましくしなやかに生き抜いていく力を持った女性になってほしい」との思いを抱きつつ、

日々生徒たちを見守っていらっしゃいます。

部活動やアルバイト 旅を通して見識を広める

中学、高校と野球部に、大学ではヨット競技部に所属しました。ヨットというと優雅なイメージですが、体育会独特の厳しい上下関係があり、兵庫県西宮市の宿舎で毎週末は合宿生活というイメージとは程遠い毎日を過ごしていました。チームスポーツの部活動を通し、仲間との人間関係づくり、礼儀を叩き込まれたように思います。一番大きかったのは粘り強さを養えたことです。運動は今も好きで、週二～三回はランニングを続けています。コンスタントに走るようになって以来、体調も崩しにくくなり、年に数回大きな大会に出場することで、良い循環ができ、時間を効率的かつ計画的に使う習慣も生まれました。

高校のときに読んだ小説がきっかけでラテン系の国々の人が持つ温かさや情熱的な気質に魅かれて、大学ではスペイン語を専攻しました。中米の現状を体感したいと、メキシコからコスタリカまで2か月ほど旅したこともあります。アルバイト代を元手にしていたので、安い長距離バスで移動、行った先々で安宿を探すチープな旅行でした。しかし、こうした旅行だったからこそ観光客としてではなく、現地の人々と同じ目線でふれ合い、貴重な経験をすることができたと思います。

また学生時代は20種類以上のアルバイトを経験しました。多くの職種にチャレンジした理由は生活や旅行のためもありましたが、いろいろな社会の側面にふれたかったからです。学生時代にしかない自由な時間、許された立場を利用し

て人生経験を積みたいといつも願っていました。卒業後は一般企業に勤めましたが、本などで情報を見聞きするうち、教えることの奥行きの高さに啓発され、教職に憧れるようになりました。働きながら資格を取り、教会でのご縁が繋がって金城学院で教鞭を執るようになったのです。今年で20年目を迎えます。



英語は表現、発信の グローバルな手段

現在は高校で英語を担当しています。英語というのはひとつの道具であり表現の手段です。今の世の中は学校で知識を吸収し、それを定着させるためだけの学習に留まることなく、自分で情報発信をし、意見を主張することが求めら

れています。生徒たちには将来、海外の人々ともかかわることを見据えて、知識の詰め込みで英語文法や単語を暗記する学習ではなく、ツールとして共通言語の英語を身に付けていく学習をしてもらいたいと思っています。そのためには、教師も時代の波に乗り遅れないよう、さまざまな教育法や考え方に日々ふれていかななくてはならないと実感しています。

生徒たちは中高一貫教育で集団生活をしていくうちに保守的、安定志向になってしまいがちなところがありますが、今以上にもっと外の世界に興味、関心を持ち、いろいろなことにチャレンジする姿勢、考え方を持ってほしい、またどんどんリーダーシップを発揮して、自分自身の個性を磨いてほしいと思っています。

金城学院の中高教育方針として謳われる「社会に参画し、主体的に生きる」という女性像。それを体現する女性、また自分の考えたことを実行し、やり遂げる力を持ち、社会の中でたくましくしなやかに生き抜いていく力を持つ女性になってほしいと願っています。

植木先生はどんな人？

高校3年の後藤友里さんと古賀麻佑子さんに植木先生について聞いてみました。「授業がとてわかりやすい」「わからないことはきちんとサポートしてくれる」との声が聞かれました。また「授業以外の悩みもアドバイスをくださり、励みになる」「教務課長としてもご多忙なのに、常に私たちを気遣ってくださいます」という言葉に植木先生の誠実さや優しさが感じられました。

